

PRAEVIDENTIA DAILY (11月1日)

昨日までの世界：HICP 大幅下振れで ECB 利下げ期待が高まりユーロ安

昨日は、ユーロ圏 HICP が前年比+0.7%と、やはり前日発表のドイツ発表分の下振れが反映され市場予想(+1.1%)を大きく下回ったことから、ECB による追加利下げ観測が急速に高まり、独中長期債利回りの大幅低下と共にユーロは対ドルを中心に 1%以上の大幅下落となった。同時に発表されたユーロ圏 9 月失業率も前月からは横ばいだが前月分の 0.2%ポイント上方修正を受けて 12.2%と過去最高水準に達していることも、景気刺激の必要性を意識させたとみられる。市場では年内、早ければ来週の ECB 政策理事会での利下げを予想する向きもみられてきており、ECB 高官発言への注目度が一気に高まっている。スイスフランもユーロにつれ安となりドル高が進行した一方、ドルは対その他通貨では前日の FOMC 後の上昇が反落するかたちとなっている。

ドル/円も、欧州時間にかけて米長期債利回りの反落と共に、前日の FOMC 後の上昇分が消えていくかたちで 98.20 円程度へじり安となったが、NY 時間入り後に発表されたシカゴ製造業 PMI が 65.9 と前月 (55.7) および市場予想 (55.0) を大きく上回り急速な改善を示したことから、米長期金利が一気に持ち直しドル/円も 98.40 円程度へ反発した。日銀決定会合関連では、展望レポートでの来年度の景気に関して、黒田総裁が記者会見で成長率見通しが若干ながら引き上げられたことと関連して、消費増税実施後の景気腰折れリスクは小さくなっていると述べており、来年の日銀追加緩和観測をやや後退させる内容といえ、ドル/円じり安の一因となった可能性もあるが、目先の円安圧力を大きく変えるものではないだろう。米経済指標に関しては、前日の ADP 民間雇用統計の+13.0 万人への下振れは少なくとも次回 11 月 8 日の雇用統計発表まではドルの重石として残ろうが、シカゴ PMI は ISM 製造業景況指数との連動性が他の地区連銀サーベイよりも若干高いことから、本日発表の ISM 製造業景況指数の上振れリスクが意識され易くなっている。

主要通貨ペアの前営業日比変化率と、連動性が高い金利・株価・商品市況の変化

	変化率	米2年金利差	米2年金利	日2年金利	米10年金利差	米10年金利	日10年金利	米株価	日株価	原油WTI	原油Brent
ドル/円	-0.2	-0.01	-0.01	+0.00	+0.01	+0.02	+0.01	-0.4	-1.2	-0.4	-0.9
	変化率	独米2年金利差	独2年金利	米2年金利	独米10年金利差	独10年金利	米10年金利	欧株価	米株価	原油Brent	西伊の対独格差
ユーロ/ドル	-1.1	-0.03	-0.04	-0.01	-0.03	-0.01	+0.02	+0.7	-0.4	-0.9	-0.03
	変化率	英米2年金利差	英2年金利	米2年金利	英米10年金利差	英10年金利	米10年金利	英株価	米株価		
ポンド/ドル	+0.0	+0.04	+0.03	-0.01	+0.06	+0.08	+0.02	-0.7	-0.4		
	変化率	豪米2年金利差	豪2年金利	米2年金利	豪米10年金利差	豪10年金利	米10年金利	世界株価	米株価	中国株価	CRB
豪ドル/米ドル	-0.3	+0.07	+0.06	-0.01	+0.03	+0.05	+0.02	-0.6	-0.4	-0.9	-0.8
	変化率	NZ-米2年金利差	NZ2年金利	米2年金利	NZ-米10年金利差	NZ10年金利	米10年金利	世界株価	米株価	中国株価	CRB
NZドル/米ドル	-0.0	+0.01	+0.00	-0.01	+0.01	+0.02	+0.02	-0.6	-0.4	-0.9	-0.8
	変化率	米加2年金利差	米2年金利	加2年金利	米加10年金利差	米10年金利	加10年金利	世界株価	米株価	原油WTI	CRB
米ドル/加ドル	-0.5	-0.02	-0.01	+0.01	+0.02	+0.02	-0.00	-0.6	-0.4	-0.4	-0.8

(注) 為替相場、株価および商品価格は前営業日比変化率、金利は前営業日比変化幅(%ポイント)。

きょうの高慢な偏見：「速報」議事要旨はどう出るか

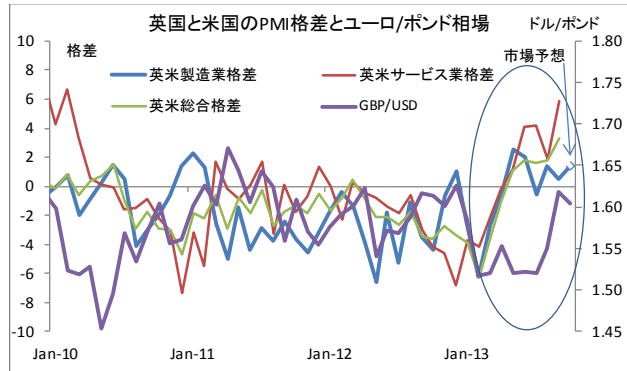
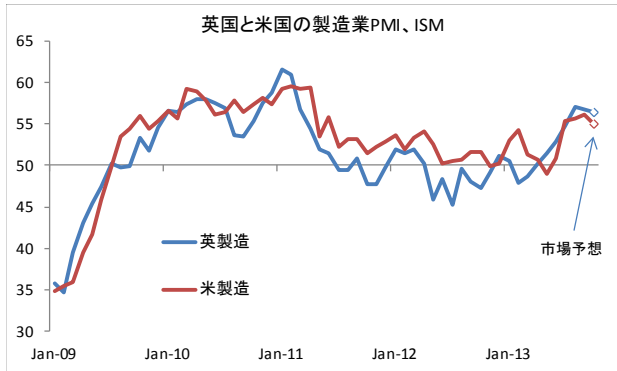
本日の相場材料としては、①中国 10 月製造業 PMI (10:00、前月 51.1、市場予想 51.2)、②中国 10 月 HSBC 製造業 PMI 改定値 (10:45、前月 50.2、速報値 50.9、市場予想 50.6)、③英 10 月製造業 PMI (18:30、前月 56.7、市場予想 56.4)、④Bullard セントルイス連銀総裁発言 (22:10、投票権あり、ややハト派)、⑤米 10 月 ISM 製造業景況指数 (23:00、前月 56.2、市場予想 55.0)、⑥Kocherlakota ミネアポリス連銀総裁発言 (0:15、投票権なし、ハト派)、⑦Lacker リッチモンド連銀総裁発言 (1:00、投票権なし、タカ派)、などが予定されている。

本日最も注目されるのは Fed 高官発言で、中でも Bullard セントルイス連銀総裁発言が重要だ。Bullard 総裁は前回 9 月会合直後に縮小見送りの判断はボーダーライン上だった、と議事要旨の内容を先取りする発言を行い、タカ派的と捉えられドル/円の FOMC 後の下落の全戻しに繋がったのは記憶に新しい。今回についても、今後の縮小計画に関する議論の一部が明らかにされる可能性がある。ドル/円は目先、Fed 高官発言や経済指標に振られつつ、98 円前後でもみあいが続く、方向感が出てくるのは 8 日の雇用統計後となる。

本日は月初日に毎月発表される米英中の製造業景況感指数も重要だ。中国については緩慢ながら改善傾向の継

続が予想されている一方、英米では前月からの悪化が予想されており、英国では2か月連続の悪化となることから、ポンド堅調の一因であった景況感改善の一服は、ポンド強気派を減らすリスクがある。

とはいえ、英国と米国の製造業PMI/ISMはほぼ同様に足許減速しており強いコントラストは出ていない（**下図を参照**）。むしろ、サービス業/非製造業の面では、米国分の大幅悪化を受けて英国の相対的優位が足許更に拡大しており、出遅れがちなポンド/ドル相場の更なるキャッチアップ（ポンド高）余地が示唆されている（**下図を参照**）。英国で金融政策上も今後重要が高まりつつあるのは住宅市場の堅調であることから、製造業の景況感が小幅悪化しても今年7月以降のポンドの上昇基調の反転には繋がらないだろう。



(注)「総合」は製造業と非製造業(サービス業)の平均。英国分は建設業も含む。

ディスクレイマー

当資料は情報提供のみを目的として作成されたものであり、金融商品の売買や投資など何らかの行動を勧誘するものではありません。ご利用に関しては、全てお客様ご自身でご判断下さいませようよろしくお願い申し上げます。

当資料は信頼できると思われる情報に基づいて作成されていますが、当社はその正確性を保証するものではありません。内容は予告なしに変更することがありますので、予めご了承下さい。

当資料は著作物であり、著作権法により保護されております。全文または一部を転載する場合は出所を明記して下さい。当資料は購読者向けに送付されたものであり、購読者以外への転送を禁じます。